

「聖地」と「遺跡」のあいだ

— ブッダガヤーにおける寺院管理

まえじまのりこ
前島 訓子 民博 外来研究員

仏教の発祥地であるインドのブッダガヤーが世界遺産に登録された。それはブッダガヤーのあり方をめぐる争点の決着なのか、それともあらたなはじまりなのか。



仏教最大の聖地

ブッダガヤー（インド・ビハール州南部）は仏教創始者であるブッダが悟りを開いた地として知られる。現地には五〇メートルを超える大塔（Mahabodhi Temple）が佇んでおり、二〇〇二年に世界遺産として登録された。遺産登録の意義は、遺跡の有する人類にとっての普遍的価値を損なうことなく、後世に継承していくという点にある。ところが、同地域の遺跡の意義はそれだけに止

まらない。その場所は現に仏教最大の聖地であり、世界遺産登録に込められる歴史的意義とは別に宗教的な意義をもち合わせているからだ。それゆえ、遺跡のあり方に関しては、その歴史的な意義と信仰上の意義をいかに調和させ両立させられるのかが争点となっている。

「聖地」か「遺跡」か

たとえば、この地を訪れた人なら誰もが、大塔の周囲において白色の大理石の巡礼路が整備

されていることに気が付くだろう。この道は、ネパール人仏教徒の奇進によって、一九八〇年代に敷設された。大理石の敷設は、考古調査局によって寺院の真正性や遺跡の聖性を減退させるとして問題視された。だが、結果的に、大理石敷設の中止には至らず、仏教帰依者の要望を受け入れる形となった。



大塔周囲に設置されたチベット仏教徒の祭壇

巡礼路が整備されると、今度は大塔の可否が争点となった。大塔管理敷地内への土足での入場は法律上禁じられてお

り、また聖域への土足規制は決して特別なことではない。だが、一九九〇年代、伝統的にこうし



世界遺産に登録された大塔 (Mahabodhi Temple)

た習慣のないチベット人仏教徒が土足で遺跡に詣りたため、当時の管理委員会関係者とのあいだでトラブルになった。警察が出勤し、一〇人もの仏教徒がとらえられた。地元住民が仏教徒の釈放を求めて抗議し、地域を巻き込む事態に発展した。この事件を受けて、管理委員会は、土足禁止を徹底的に実施するのではなく、土足許可エリアの修正を図った。そして、二〇〇八年には、管理委員会が土足での寺院入場の禁止を解除する決定を下したとの報道があった。この決定は、冬場は早朝の気温が



大塔に参詣する仏教巡礼者

二〜四度と低く道が冷え、夏場は気温が高く道が高温になることから、土足の許可を求めている参詣者に配慮した対応であった。だが、この決定には異論もあった。仏教徒のなかには、聖域への土足での入場を反対する者もおり、彼らはこの決定を抗議し、違反した場合は罰金を科すよう要求するなど、異議を申し立てた。その後、寺院管理地内への土足での入場は再び禁止されており、管理委員会の決定は「一時的なものにとどまった。いずれにせよ、土足可否をめぐる事例は、多かれ少なかれ信仰の



大理石が敷設された参道。写真正面で確認できるのは参詣者が触れないように周囲を囲われた菩提樹。この樹は、ブッダが悟りを開いた当時の樹のDNAを受け継ぐとい

要素が遺跡のあり方に影響をおよぼしていることを示している。

「ブッダガヤー」の行方

遺跡の保存・保護の観点からすれば、できる限り遺跡への接触を制限する方法が考えられる。しかし、いずれの事例においてもその選択肢ははたされず、もちろん、その可能性がなかったわけではない。同地域の遺跡管理を、管理委員会（一九五三年以来、ブッダガヤーの遺跡を管理する専門機関）から、考古調査局に移譲する提案があった。だが、管理委員会は、遺跡が単

なる遺跡ではなく現に生きてい

る寺院であり、考古学的意義以上に宗教的な意味が込められている場所だとして、当の提案を受け入れなかったのだ。

とはいえ、世界遺産登録以降、遺跡管理は、管理委員会による管理だけでは完結しなくなっている。管理委員会は、考古調査局との連携を図り、遺跡の保存・保護を強化しつつある。しかしながら、信仰上の差異はいろいろおよぼす文化的、社会的背景を異にする参詣者の数が増すなか、遺跡のあり方が思わぬ緊張の火種となる可能性は常に存在する。同地域の遺跡が宗教的に生きてい

る（生きられる）場所であればこそ、こうした緊張の可能性は避けられないだろう。要するに、「世界遺産登録」は、「ブッダガヤーはどうあるべきか」という問題の決着ではない。むしろ、今後その行方が問われるあらたな争点の始まりなのである。